

## 要約、クローズテスト、多肢選択テストと段落構造が学習者におよぼす影響

Effects of summary, cloze, multiple-choice, and paragraph structure on English learners

キーワード：学習者論、読むこと、教授法

内 藤 徹  
NAITO Toru

### 1. はじめに

現在、英語教育ではCLT (Communicative Language Teaching) が重視されている。リーディングにおけるコミュニケーションを達成するためには、読み手は書き手の意図を理解し、その要点を掴まなければならない。これには、要点を見つけそれらを論理的に再構築し自分の言葉で簡潔に表現する要約が、その能力を身につける良い方法と考えられる。要約は、リーディングにおけるコミュニケーション能力を高めるのに役立ち、学習者の理解度を判断したり、読解や言語上の問題を解決するのにも役に立つと考えられる。また、今日、国公立大学の二次試験問題にも要約を求める問題が多数出題されており、要約指導はこれに備える点でも必要と考えられる。そこで、要約と他の2つの方法を比較し優位性があるのかどうかを検証してみたい。他の2つの方法の1つはクローズテスト。もう1つは、大学入試センター試験にも取り入れられている多肢選択テストである。

さらに、構造が良いテキストと悪いテキスト、すなわち、本稿では段落があるテキストとないテキストでは、学習者がどれだけ影響を受けるのかについても考察・検証したい。

### 2. 先行研究と理論的背景

米国では、リーディングの指導として、テキスト構造、要約をストラテジーとして小学校から教えていることからわかるように、要点を把握する訓練は重要である。また、テキスト構造は要約と深く関わっており、要約はテキストの処理、読解、情報の記憶保持や再生に役立ち、テキスト内容や構造に関して注意力を高めることが Taylor et al. (1984)、Rinehart et al. (1986)、Armbruster et al. (1987) などによって実証されている。さらに、Brown and Day (1983) は要約のストラテジーとして、選択・削除・統合・創造をあげ、成人は統合や創造を、子どもは選択や削除を使用することが多いと報告している。そして、要約訓練は、要旨を論理的にまとめて構成していく能力や表現力においても、かなりの効果があると述べている。

Johnson (1983)、Block (1986) などによれば、要約とは、要点を再構築して、書き手の意図を簡潔に伝えることである。また、リーディングも言語知識の理解だけでなく、文章の要点を再構築して書き手の意図を理解することである。従って、両方のプロセスがどちらも同じく、要点の再構築であるのなら、優れた読み手は要約がうまいと考えられる。

Taylor (1982) は簡単な Questions and Answers では、読み手に対する評価を充分に行えなかったが、要約では評価を明確に行うことができたと述べている。また、Hare and Borchardt (1984) は、要約と

多肢選択は、読解上の異なった思考処理を評価すると述べている。これは、要約と多肢選択を比較すると前者の方がより積極的な活動と考えられるからであろう。そして、この積極性という意味において、中間に位置するのがクローズテストと考えられる。

中野(1993)は、要約問題と内容理解を問う多肢選択問題、そして構造の良いテキストと悪いテキストを用いて実験を行い、次のような結果をまとめている。

- (1) 読みの評価では、要約問題と多肢選択問題との相関はなかった。
- (2) 点数の良い good readers でも、テキスト構造が関わってくると、必ずしも要約が上手とはいえない。すなわち、構造の良いテキストを要約した poor readers は、構造の悪いテキストを要約した good readers よりも高い得点をとった。
- (3) 構造の良いテキストであれば、good/poor readers とも多肢選択問題および要約問題での得点は高い。
- (4) 構造の悪いテキストであれば、good/poor readers とも多肢選択問題および要約問題での得点は低い。

最後に、一般的にはまだ定まっているとはいえないが、要約の定義は *Webster's Third New International Dictionary*(1963)によれば "summarize = to tell in or reduce to a summary : present briefly : sum up" そして、"summary = constituting or containing a summing up of points : covering the main points concisely : summarizing very briefly" である。そして、要約の量は原文の 1/3 ～1/4 が一般的見解といえる。

### 3. 実験研究

- (1) 被験者 鯖江高等学校 2年5組 38名、2年6組 35名 : 合計73名  
5組には、段落のない英語の文章を与え、6組には段落のある英語の文章を与えた。内容は両組とも同じである。
- (2) 仮説
  - 1) 要約、クローズ、多肢選択の問題はその得点においてそれぞれ相関が高い。
  - 2) 学力上位群(GOOD READERS)は学力下位群(POOR READERS)と比べて、要約、クローズ、多肢選択問題においても、その得点は高い。(ただし、学力上位群は読解力上位群と完全に同一視はできない。)
  - 3) 構造の良し悪し、すなわち段落の有無は、要約、クローズ、多肢選択問題とも、その得点に影響を与える。

### (3) 分析方法 [内藤(1997)、Hatch(1982)]

t-TEST = t 検定 (2つの平均の有意差検定)

ONE-WAY ANOVA = 一元配置法分散分析 (複数の平均の有意差検定)

→ RYAN'S METHOD = ライアンの法 (各サンプル間の有意差検定)

PEARSON PRODUCT MOMENT COEFFICIENT = 相関係数 (相関)

(4) テスト

英語Ⅱ＝学期末考查問題「リーディング」：事前テストとして、5組と6組に有意差があるかどうかを調べるためと、学力上位群と学力下位群を分けるためのテスト

CLOZE＝クローズ・テスト：7語ごとに語を削除する問題で25ブランクがある。

SUMMARY＝要約問題：195字程度に要約させる。

M－C＝MULTIPLE CHOICE＝多肢選択問題：質問文に対して、4つの選択肢の中から最も適当なものを1つ選ばせる。

(5) 結果

TABLE 1 (5組〔実験において段落無の英語の文章を与えた組〕と

6組〔実験において段落有の英語の文章を与えた組〕)

	5組	6組		5組	6組		5組	6組		5組	6組
	英語Ⅱ	英語Ⅱ		CLOZE	CLOZE		SUMMARY	SUMMARY		M－C	M－C
TOTAL	2576	2486		1224	1904		1600	2600		1620	3080
MEAN	62.8	63.7		32.2	54.4		42.1	74.3		68.9	88.0
SD	17.3	14.6		17.5	14.9		29.7	30.8		35.2	18.0
NUMBER	38	35		38	35		38	35		38	35
MAX	89	95		64	81		100	100		100	100
MIN	23	33		0	8		0	0		0	20
RANGE	66	62		64	76		100	100		100	80

5組と6組の

→実験

t-TEST      p<0.9                      \*\*\*p<0.001                      \*\*\*p<0.001                      \*\*p<0.006

TABLE 2 (5組と6組の各テスト間の相関表)

5組			6組		
	SUMMARY	M－C		SUMMARY	M－C
CLOZE	.52***	.25	CLOZE	.40*	.08
SUMMARY		.36*	SUMMARY		.54***

\*\*\*p<0.001  
\*\*p<0.01  
\*p<0.05

TABLE 3 (5組、6組の学力上位群と下位群の分散分析)

5組(上位群) [1]

	英語Ⅱ	CLOZE	SUMMARY	M－C
TOTAL	1453	724	1100	1100
MEAN	76.5	38.1	57.9	73.7
SD	7.71	16.9	26.7	36.2
NUMBER	19	19	19	19

6組(上位群) [2]

	英語Ⅱ	CLOZE	SUMMARY	M－C
TOTAL	1373	972	1480	1620
MEAN	76.3	54.0	82.2	90.0
SD	7.71	13.1	26.6	19.1
NUMBER	18	18	18	18

MAX	89	64	100	100
MIN	65	0	0	0
RANGE	24	64	100	100

MAX	95	68	100	100
MIN	66	20	20	20
RANGE	29	48	100	80

### 5 組（下位群）[3]

	英語Ⅱ	CLOZE	SUMMARY	M - C
TOTAL	908	500	500	1220
MEAN	50.4	26.3	26.3	64.2
SD	12.3	15.9	23.4	33.5
NUMBER	19	19	19	19
MAX	65	64	80	100
MIN	23	0	0	0
RANGE	42	64	80	100

### 6 組（下位群）[4]

	英語Ⅱ	CLOZE	SUMMARY	M - C
TOTAL	903	932	1120	1460
MEAN	53.1	54.8	65.9	85.9
SD	10.2	16.6	32.7	16.5
NUMBER	17	17	17	17
MAX	64	84	100	100
MIN	33	8	0	40
RANGE	31	76	100	60

学力上位群と学力下位群の英語Ⅱの

t-TEST \*\*\*p<0.001

\*\*\*p<0.001

ANOVA(ANALYSIS OF VARIANCE)→RYAN'S METHOD

CLOZE 全体 \*\*\*p<0.001

p<0.05

	[1]	[2]	[3]
[2]	*		
[3]		*	
[4]	*		*

p<0.01

	[1]	[2]	[3]
[2]	*		
[3]		*	
[4]	*		*

p<0.001

	[1]	[2]	[3]
[2]			
[3]		*	
[4]			*

SUMMARY 全体 \*\*\*p<0.001

p<0.05

	[1]	[2]	[3]
[2]	*		
[3]	*	*	
[4]			*

p<0.01

	[1]	[2]	[3]
[2]			
[3]	*	*	
[4]			*

p<0.001

	[1]	[2]	[3]
[2]			
[3]		*	
[4]			*

M - C 全体 \*p<0.05

p<0.05

	[1]	[2]	[3]
[2]			
[3]		*	

p<0.01

	[1]	[2]	[3]
[2]			
[3]			

p<0.001

	[1]	[2]	[3]
[2]			
[3]			

[4]			
-----	--	--	--

[4]			
-----	--	--	--

[4]			
-----	--	--	--

\* [2] と [3] の有意差については、この場合比較をする必要はない。なぜなら、段落のある構造の良い英文を与えた 6 組の学力上位群は、段落のない構造の悪い英文を与えた 5 組の学力下位群より勝つことは確実で、考察に関わってこないからである。

#### (4) 考察

実験前の「英語Ⅱ」の考査の成績においては、5 組と 6 組には有意差はなく、両組ほぼ等質な集団である。

実験では、5 組に段落のない、いわゆる構造の悪い英語の文章を与え、6 組には段落のある、いわゆる構造の良い英語の文章を与えた。その結果、5 組と 6 組では、「クローズ」で 0.1% 水準、「要約」でも 0.1% 水準、「多肢選択」で 0.6% 水準で有意差があり、6 組の方が 5 組よりもかなり勝るといえる。[TABLE 1 参照] すなわち、段落のある文章は READING をはるかに容易にすると考えられる。

相関に関しては [TABLE 2 参照]、5 組では、「要約」と「クローズ」が 0.52\*\*\* で 0.1% 水準、「要約」と「多肢選択」が 0.36\* で 5% 水準で有意な相関がある。そして、6 組では、「要約」と「クローズ」が 0.40\* で 5% 水準、「要約」と「多肢選択」が 0.54\*\*\* で 0.1% 水準で有意な相関がある。従って、両組において、「要約」と「クローズ」「多肢選択」には有意な相関があったといえる。

そして、GOOD READERS と POOR READERS の差をみるために、5 組と 6 組を、それぞれ学力上位群と学力下位群に分けた。[TABLE 3 参照] 両組とも 0.1% 水準で有意差があり、上位と下位の差は明確である。分散分析の結果、「クローズ」では、全体で 0.1% 水準で有意差があり、さらにライアンの法では、[1] と [2] には 1% 水準、[3] と [4] には 0.1% 水準で有意差がみられた。そして、[1] と [4] には 1% 水準で有意差があった。これは、5 組の GOOD READERS よりも、6 組の POOR READERS の方が勝っていたということで、「クローズ」は段落のある構造の良い文章の方が、はるかに読み易くなるということである。「要約」では、分散分析で全体的に 0.1% 水準、さらにライアンの法では [1] と [2] に 5% 水準、[1] と [3] に 1% 水準、[3] と [4] に 0.1% 水準で有意差がみられた。しかし、[1] と [4] には、有意差といえるものはみられなかった。「多肢選択」では、分散分析で全体的に 5% 水準、さらにライアンの法では [2] と [3] に 5% 水準で有意差がみられたが、それ以外には、有意差はなかった。

最後に、仮説の検証である。「1) 要約、クローズ、多肢選択の問題はその得点においてそれぞれ相関が高い」は「要約」と「クローズ」「多肢選択」には有意な相関があったが、「クローズ」と「多肢選択」には低い相関しかなかった。従って、「要約」と「クローズ」「多肢選択」間においては支持されたが、「クローズ」と「多肢選択」間においては支持されたとはいえない。「2) 学力上位群(GOOD READERS)は学力下位群(POOR READERS)と比べて、要約、クローズ、多肢選択問題においても、その得点は高い」は、段落構造が関わらないところでは、学力上位群と学力下位群において得点において差があり、上位群の方がよい。特に、5 組では「要約」で [1] と [3] において 1% 水準で

有意差もみられる。しかし、段落構造が関わってくると、学力上位群(GOOD READERS)は必ずしも「要約」「クローズ」「多肢選択」の問題がうまくできるとは限らなかった。それは、6組の POOR READERSの方が、5組の GOOD READERSよりも、すべてのテストにおいて得点が高かったからである。「クローズ」においては、特に 5% 水準での有意差があった。「要約」と「多肢選択」においては、有意差といえる程の差ではなかったが、差がでたことは確かである。従って、2) は支持されなかった。「3) 構造の良し悪し、すなわち段落の有無は、要約、クローズ、多肢選択問題とも、その得点に影響を与える」は、5組と6組に「クローズ」「要約」とも 0.1% 水準、「多肢選択」は0.6% 水準で有意差があり、支持された。

#### 4. おわりに

要約は、要点を見つけそれらを論理的に再構築し自分の言葉で簡潔に表現することであり、リーディングにおけるコミュニケーション能力を高めるのによい方法であると考えられる。この「要約」が「クローズ」や「多肢選択」と有意な相関があったということは、本稿の中では信頼性の面からも歓迎されることである。また、段落のある構造の良いテキストを読んだ学力下位の学習者が、段落のない構造の悪いテキストを読んだ学力上位の学習者よりも高い得点を取り、GOOD READERS と思われた学習者が、構造によっては POOR READERS になってしまうということも分かった。これは、リーディングがいかに段落構造に影響されるかを意味するもので、パラグラフ・リーディングなどの指導の必要性が、ますます重要だと考えられる。高校生においても、パラグラフの意味のとり方やパラグラフ内での要点の掴み方の指導が大いに必要と思われる。なお、別のもっと学力の高い2つの組では、同じ3種類の問題で、有意な差はでなかった。つまり、被験者にとって教材が易しいと、段落構造に影響されなかったということも付記しておきたい。

(福井県立 鯖江高等学校)

#### 引用文献

- Ambruster, B.B., Anderson, T.H. and Ostertag, J. 1987. "Does text structure/summarization instruction facilitate learning from expository text?" *Reading Research Quarterly*, Vol. 22, No.3, pp.331-346
- Block, E. 1986. "The comprehension strategies of second language readers." *TESOL Quarterly*, Vol.20, No.3, pp463-494
- Brown, A.L. and Day, J.D. 1983. "Macrorules for summarizing texts: The development of expertise." *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, Vol.22, pp.1-14
- Hare, V.C. and Borchardt, K.M. 1984. "Direct instruction of summarization skills." *Reading Research Quarterly*, Vol. 20, No.1, pp.62-78
- Hatch, Evelyn and Hossein Farhady 1982. *Research Design and Statistics for Applied Linguistics*, Newbury House Publishers, Inc.
- Johnson, P. 1983. "Text analysis and reading comprehension." *RELC Journal*, Vol.14, No.1, pp.46-56
- 内藤 徹 1997. 『新しい 英語教育ハンドブック』 リーベル出版, pp.22-30
- 中野幸子 1993. 「要約とテキスト構造が日本人 EFL 学習者の読解に及ぼす効果」『上越教育大学大学院言語系(英語) 研究論集 No. 8』 pp.59-73
- Rinehart, S.D., Stahl, S.A. and Erickson, L.G. 1986. "Some effects of summarization training on reading and studying." *Reading Research Quarterly*, Vol. 21, No.4, pp.422-438
- Taylor, B.M. 1982. "Text structure and children's comprehension and memory for expository material." *Journal of Education Psychology*, Vol.74, No.3, pp.323-340
- Taylor, B.M. and Beach, R.W. 1984. "The effects of text structure instruction on middle-grade students' comprehension and production of expository text". *Reading Research Quarterly*, Vol.21, No.2, pp.134-146